慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ヴェトナム語語頭子音結合の消滅過程とその解釈』
Sub Title	The process and interpretation of disappearance of Vietnamese initial clusters
Author	田島, 英一(Tajima, Eiichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.414(33)- 429(18)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0429

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ヴェトナム語語頭子音結合の消滅過程とその解釈』[1]

田　島　英　一

1．東アジアから東南アジアにかけての地域には、一音節が一形態素に相当するという特徴を持つ、一群の言語が分布する。これが所謂「単音節型言語（mono-syllabic language）」であり、具体的には中国語諸方言、チベット・ビルマ系諸語、ミャオ・ヤオ系諸語、タイ系諸語、そして系統不明のヴェトナム語等がこれに相当する。記号としての言語が持つ情報伝達能力という観点から見た場合、この「一音節＝一形態素」という原則は、大きな制限として働かざるをえない。例えば日本語の場合、所謂「五十音」に濁音等を加えた、わずか100余りの音節を有するのみである。[2] もし日本語に「一音節＝一形態素」という原則が存在したならば、形態素同士の組み合わせで複雑な単語を形成するにもせよ、日常生活における情報伝達にすら支障を生じるに違いない。つまり日本語のように音節構造の単純な言語には、このような原則はそぐわないわけで、逆にこのような原則を持つ言語は、何らかの形で音節構造を複雑にし、存在可能な音節の数を増やす必要があるといえる。そのための工夫の一つとして、声調（tone）と呼ばれる現象が、この地域の言語に広く見られる。

声調は音韻における超分音性（super-segmental）の弁別的特性であり、一般には音節の属性である。例えば、中国語北京方言は、語頭子音、介音、母音、韻尾からなる、分音的には比較的単純な音節構造を持つが、更に4種類の声調を使用することにより、理論上約1700の音節の弁別が可能になる。[3]

このように声調は、言語の許容伝達情報量を飛躍的に増大させるが、その一方で、声調を持たない単音節言語も存在する。例えば、チベット語の

西部方言やアムド方言には声調がない。これらの言語では、多様な組み合わせを持つ語頭子音結合が、声調に代わって音節構造を複雑化しているのである。7～8世紀頃のチベット語を表記したものであろうと考えられる書面チベット語も、かなり複雑な語頭子音結合を有している。[4] おそらく西部方言やアムド方言は、より古い形式を保存した言語なのであり、元来チベット語には声調がなかったのであろう。逆に、ラサ方言やカンバ方言に声調が存在するのは、語頭子音結合が消失し、音節構造が単純化されたためであると考えられる。

こう考えてみると、上古中国語に複子音があったとするカールグレン氏や李方桂氏らの学説は、極めて興味深い。[5] なぜならこの学説が事実であるとすれば、チベット語ばかりでなく他の単音節型言語でも、語頭子音結合の消滅が進化の一般的趨勢である、との仮説を立てることが、あながち無理ではなくなるからだ。事実現代ヴェトナム語では、少なくともハノイ方言からは語頭子音結合が消失してしまっているが、17世紀までは数種類の子音結合が用いられていたことが、当時ヴェトナムを訪れた宣教師らによって記録されている。

時代のずれがあるにもせよ、この地域の単音節型言語が等しく子音結合消失（また、それに連動する声調の発生と複雑化）の方向で進化してきたのだとすれば、そこに何らかの必然的要因を仮定することは、研究者として極めて自然な態度であろう。本稿はヴェトナム語の語頭子音結合の消失過程について考察し、中国語との言語接触が、その必然的要因のひとつとして働いた可能性を示唆したい。

2.1. かつてHenri Maspero氏は、ヴェトナム語の発展過程を5つの時代に区分した。その5つの時代とは、[6]

①原始ヴェトナム語（Protoannamite）：漢越語成立以前

②上古ヴェトナム語（Annamite archaïque）：漢越語成立（10世紀頃）

③中古ヴェトナム語（Annamite ancien）：『華夷訳語』の中国語―ヴェトナム語口語語表（15世紀）

④中世ヴェトナム語（Annamite moyen）：ド・ロード師の辞書（17世紀）

⑤近代ヴェトナム語（Annamite moderne）：19世紀

である。つまり漢越語（Sino-Vietnamese）、『華夷訳語』など、部分的に残された資料をもとに点的な区分（例えば「10世紀頃」とはいえても、「10世紀～14世紀」などという規定はできない）をしているのみで、各時代の境界については何の規定もない。無論これは資料不足からくる必然的な結果であって、Maspero氏を責めることはできない。点的な区分しかできないのは今日の研究でも同様であり、ヴェトナム語史について考えるということは、とりもなおさずここに挙げられたような限られた資料について考えるということになる。

まず漢越語であるが、これはかつてのヴェトナム人によって自国の言語にとりいれられた中国語の音節であって、日本語の呉音・漢音にほぼ相当するものである。ただし漢越語の場合、その摂取の仕方がより直接的であり、しかもより長期間にわたって行われたので、どの音節がいつとりいれられたのかについては、極めて断定が難しい。中国によるヴェトナム支配は、漢武帝の九群設置以来、実に千年に及んだ。しかもその支配形態は、例えばヴェトナム人の首長を南越王として冊封するといった間接支配ではなく、漢人官僚による完全な植民地支配であった。この過程でヴェトナム人は漢人と接し、官僚や教養人は当然のこととして漢人官僚と同じ漢語を話し、やがて少なからぬ漢語の音節が民族語の中にも吸収されていった。これが漢越語であり、当時の中国語を考える上でも、またヴェトナム語を考える上でも、重要な資料となっている。

次に『華夷訳語』だが、これは明代の四夷館において編集された、中国語と近隣諸民族語の対訳語彙集である。日本、琉球、朝鮮、占城（チャムパ）、波斯（ペルシャ）、女真（ツングース）などの『訳語』が編集されて

おり、中国語／ヴェトナム語の対訳語彙集は、『安南訳語』と呼ばれている。『安南訳語』では、他の『華夷訳語』同様漢字で当時の民族語を音写しているため、明代中国語の音韻を参考にしつつ、その民族語のおおよその音価を推測する以外に、再構成の方法がない。この『南安訳語』の体系的な研究としては、陳荆和氏の『南安訳語の研究』が知られており、本稿は論を進めるにあたって、少なからずこの陳氏の再構成形式を参考にしている。

中世ヴェトナム語を代表する資料としてMaspero氏が挙げている「ド・ロード師の辞書」については、本稿の主な考察対象となるため、以下に詳しくふれたい。

2.2. 上にいう「ド・ロード師の辞書」とは、1651年ローマにおいて刊行された、Alexandre de Rhodes著"Dictionarivm Annamiticvm Lvsitanvm et Latinvm."を指す。[7] 著者はイエズス会の宣教師であり、当初日本における伝道を志したが、おりあしく家光の鎖国にあい、行先をヴェトナムに変えて宣教を行った人物である。辞書の序文等がラテン語で記されているため、著者の名前もラテン語式に「ロデス」と読むべきだとの指摘もあるが[8]、ここでは研究者やカトリック教会における通例に従って、「ロード」と呼ぶことにする。ロード師は『辞書』の序文において、参考とした辞書の存在についてふれている。それによれば、師はGaspar de AmaralおよびAntoine Barbosaの両名によるヴェトナム語辞書を参照しつつ、自らの辞書を編纂したらしい。しかしこの先達の辞書は既に失われており、師の『辞書』が、表音文字でヴェトナム語を記録した最も古い資料ということになる。

師の採用した表記法は、若干の相違はあるものの、基本的に現代ヴェトナム語の正記法"quốc ngữ'"と同一のものであり、恐らく"quốc ngữ'"の直接の母体になっているものと考えられる。従って、中世ヴェトナム語特有の形式が記録されていても、現代ヴェトナム語における対応形式は、

比較的容易に見いだされる。

そうした中世ヴェトナム語特有の形式の中で、特に目をひくのは、bl-、tl-、ml-、等の語頭子音結合の存在である。

bl-：blò'i（天）、blai（若者）、blan（祭壇）など。
tl-：tlên（上）、tlăm（百）、tle（竹）など。
ml-：mló'n（大きい）、mlẽ（道理）、mlẩ（愚かな）など。

これらの子音結合は、現代ヴェトナム語においては既に消失しているものであり、しかもこうした子音結合を記録する最後の資料が、この『辞書』なのだ。19世紀前半に刊行されているTaberd氏の"Dictionarium Anamitico Latinum."では、既にこの形式が見られなくなっている。(9)

『辞書』に記されたこれら語頭子音結合は、実は消滅過程にある子音結合の生き残りであって、かつてのヴェトナム語にはもっと豊富に子音結合が存在したであろうことを示す事実が、いくつかある。例えば、陳荆和氏は『安南訳語』に記録されたヴェトナム語の形式として、krâu（深い）、klống（鼓）、prai（酢）等を再構成している。これらの子音結合は、現代ヴェトナム語にはもちろん、『辞書』にも見当たらない。また、ヴェトナム語とごく近い親族関係にあるムォン諸語には、更に多くの語頭子音が見い出される。例えばMaspero氏は、現代ヴェトナム語のtrò'i（天：現代ハノイ方言の発音は［ʈʂəj］）及びtrâu（水牛：現代ハノイ方言の発音は［ʈʂəw］）に、次のようなムォン諸語の形式が対応すると述べている。(10)

	タクビー	ヴァンモン	ミーソン
trò'i：	klo'y	tlo'y	plo'y
trâu：	klu	tlu	klu

しかし、ごく古い時代の語頭子音結合について考察するのは、困難を極める。いうまでもなく、資料が絶対的に不足しているからである。しかも

ヴェトナムは、インド文化圏に属する他の東南アジア諸国と異なり中国文化圏に属するため、古い形式を保存するインド系の表音文字が残っているわけでもない。従って本稿は、『辞書』を信頼できる数少ない資料としてとらえ、専らそこに記録された子音結合の形式を考察の対象とする。

3.1. tl-

『辞書』に記録されている中世固有の子音結合のうち、最も項目数の多いのがtl-である。このtl-はquốc ngữ'のtr-に対応し、現代ハノイ方言では破擦音になる。

		quốc ngữ'	現代ハノイ方言
tla（置く）	:	tra	[ʈʂa̰]
tlái（逆さまの）	:	trái	[ʈʂa̰j]
tlèo（這う）	:	trèo	[ʈʂɛ̰w]
tlích（鰯）	:	trích	[ʈʂik]
tlòn（丸い）	:	tròn	[ʈʂɔ̰n]

ここで最初に挙げたtlaの項目の中で、ロード師はおもしろい指摘をしている。彼によれば、当時のヴェトナム語では、ｔの後ろのｒとｌは自由に交替したというのである。つまり、tr-とtl-は当時異音関係にあったのであり、quốc ngữ'に代表される形式が既に使用されていたものと考えられる。しかも「tr-とtl-が交替する」とはいわずに、「ｔの後ろではｌとｒが交替する」といういい方をしているあたりから考えて、当時のtr-は、現代ハノイ方言のように破擦音化していたのではなく、現在南部ヴェトナムの一部方言に見られるような、[tr] という複子音の形式をまだ保存していたのであろう（但し後述するように、漢越語のtr-はこの限りではない）。

このｌとｒの交替は、実はかなり古い時代から始まっていた形跡がある。かつてヴェトナム語には、漢字を応用して創作した「チュノム（chữ'

nôm)」という民族文字が存在した。このチュノムには、漢字同様「六書」でいうところの「形声」文字も含まれていたが、いくつかの形声文字は、その音符がl-の語頭子音を表す来母の漢字であるにも関わらず、しばしばr-の語頭子音を持つquốc ngữ'に対応している。[11]

チュノム	quốc ngữ'
「𢧢」(「裂」が音符) ……	rách (弱い)
「𢧵」(「弄」が音符) ……	rông (広い)
「𩦎」(「朗」が音符) ……	ráng (夕焼け雲)

Maspero氏の指摘するところによれば、民族語化してしまった漢越語(つまりヴェトナム語固有の音節として認識されるに至った、漢越語の音韻対応法則に従わない漢語起源の音節)にも、やはり同様の l > r という変化が見られる。[12] そのような変化がいつ始まったか、またどのような条件で起こったかは定かではないが、tl/trという交替は、かつて広汎にわたって見られた l > r という変化の痕跡であろう。

では、なぜ19世紀になるとtl-という形式が完全に消失したのだろうか。また、当初[tr]という子音結合であったtr-が、なぜ破擦音化したのか。これらの問題に関しては、後程ふれてみたい。

3.2. bl-

『辞書』に記録された、bl-の語頭子音を持つ見出し語は、全部で94項目ある。次に若干の例を補足する。

		quốc ngữ'	現代ハノイ方言
blả (解き放つ)	:	trả̂	[ʈʂa˧˩˧]
blêy (塗る)	:	trây	[ʈʂəj˧˧]
blia (平らにする)	:	tria	[ʈʂiə˧˧]

blớ'（向きを変える）	:	trớ'	[ʈʂə̌]
bluông（荒地）	:	truông	[ʈʂuoŋ]

94項目のうち7項目については、同義語としてtl-の語頭子音を持つ形式を記録している。例えば、「blai / tlai（若者）」「blát / tlát（塗る）」などがそうであるが、tl- / tr-の場合と異なり、「bとtはlの前で交替する」などといった記述はない。一見したところ、共時面でbl- / tl-の交替が起こっているように見えるが、7項目という少ない数と、ロード氏の記述から考えて、当時このような交替現象があったとは考えにくい。7項目の対応例は、音韻的な交替形式の関係にあったというよりも、異形態の関係にあったと考えた方が、よさそうである。

しかしわずか7語とはいえ、bl- / tl-という規則的な対応を示す同義語が存在したことは、無視すべきではない。なぜこのような同義語が存在したのか、その答えは、やはりロード師の観察の中にあるように思われる。師は「tlai（若者）」の項目の中で、「"con tlai"は"con blai"よりも良い（＝melius："bonus"の中性の比較級形）」と述べている。"melius"とはまた漠然とした表現だが、少なくとも何らかの価値判断を含んだ言葉であることは間違いない。

ここから先は推測に頼らざるを得ないのだが、恐らく両者には文体的な差異があったのではないだろうか。つまりtl-の形式は、何がしかの理由で、bl-の形式よりも上品もしくは規範的であると、認識されていたのである。例えばbl-の形式が方言中に残留した古い形式であり、少なくともトンキンの宮廷人は使わなかった、などという状況を仮定してみれば、ロード師が"melius"という表現を使ったのも素直にうなずける。また方言であると仮定しておけば、なぜ規則的な音韻対応が存在するのかも説明がつく。数量的にも、bl-の項目は数が少ない。非規範的であると認識されていたbl-の形式は、少なくとも師のいう「トンキン語」からは、淘汰される途上にあったのであろう。

ちなみに、bl-はquốc ngữ'のgi-とも対応するといわれる。[13] 例えば、

blò'i / giò'i (天)　　blang / giăng (月)

blo / gio (灰)　　blun / giun (みみず)

といった例があるが、『辞書』にbl- / gi-の交替例は見当たらない。bl-の形式がtl-の形式と競合し、淘汰寸前の状態であったことも考えると、bl- > gi-という変化が引き続き起こったとは考えにくい。もちろん、両者が共通の来源形式を持つことは、その対応の規則性から疑いのない事実であろう。恐らくはgi-もまた、bl-とは別の方言形式（そしてその方言は、少なくともロード師の記述の対象にはならなかった）であったのだと考えられる。

3.3.　ml-

ml-については、先に挙げた例の他に、次のようなものがある。

		quốc ngữ'	現代ハノイ方言
mlài（扇子の頭）	:	nhài	[ɲaˈj]
mlát（打撃）	:	nhát / lát	[ɲaˈt] / [laˈt]
mlat（つまらぬ）	:	nhat	[ɲaˈt]
mleü（魚の一種）	:	nheo	[ɲɛˈw]
mlò'i（言葉）	:	nhò'i / lò'i	[ɲəˈj] / [ləˈj]

『辞書』に記録されたml-の語頭子音を持つ語は、l-、mnh-、nh-という、実に3種類に及ぶ交替形を持つ。このうちnh-とl-の形式は現存するが、ml-とmnh-は19世紀以前に消失した。次は『辞書』に記録された、「mlâm（しくじり）」とその交替形式である。

mlâm / lâm / mnhâm / nhâm

こうした交替形式の存在から考えられるのは、並行する二つの語形変化が、一時期のヴェトナム語に存在したであろうということである。つま

り、

①ml- > l-

②ml- > mnh- > nh-

（1の鼻音化：順行同化）　（mの脱落）

という変化である。ml-の形式はわずか23項目、mnh-に至っては2項目しか見出し語がない。どうやらこの変化は、当時ほぼ完了しつつあり、ml-、mnh-などの形式は、細々とその命脈を保っていたに過ぎないらしい。

こうした状況は、bl-の場合とよく似ている。ml-はもはや淘汰されつつあり、しかもbl-同様野卑な、あるいは非規範的な形式であると認識されていたらしいからだ。それはロード師が、「nhâm（しくじり）」の項目において、「“nhâm”は“mlâm”よりも良い（＝melius)」と述べていることからもわかる。一般に、より古い形式というものは、上品な言葉遣いとして好まれるものだが、方言に残った古い形式は、かえって野卑な印象を人々に与える。もはや当時のトンキンでは、卑俗な会話の中でしかml-の形式が用いられなくなっていたのであろう。

4．以上の考察から、『辞書』が編纂された17世紀当時、既にbl-、ml-（及びmnh-）の形式はほぼ消滅寸前の状態にあり、tr-と交替するtl-のみが、広く用いられていたらしいことがわかってきた。ところがそのtl-も、19世紀には完全に消滅してしまっている。では、17世紀から19世紀までの空白の200年間に、一体何が起こったのであろうか。

この問題を考えるに当たって、まずはっきりとさせておかねばならないことがある。これまで不用意にtr-といってきたが、実はtr-の形式を持つ音節には、大きく分けて二つの種類がある。漢越語と民族語である。漢越語のtr-は、中古中国語の知母、澄母、照母などを来源としている。[14] これらの声母がいかなる音価を有していたかは、研究者により意見の分かれると

ころであるが、無気の口蓋音（[ʈɕ]［ʈʂʰ］など）かそり舌音（[ʈ]［ʈʂ］など）であったことは間違いない。しかも破擦音か、あるいは極めてそれに近い音であったはずである。一般に知母、澄母は破裂音、照母は破擦音であるといわれているが、それは『切韻』（7世紀初）の時代の話である。そもそも上古中国語において歯音（t、t'、d）であった知徹澄母が、中古中国語において歯音から独立したのは、後方の韻母（もしくは介音）の影響で、口蓋化（もしくはそり舌化）を起こしたからだ。しかもこの口蓋化（もしくはそり舌化）は、決して7世紀に完了してしまった音韻過程ではなく、その後も継続した。これによって、7世紀にはʈ、ʈ'、ɖ（もしくはʈ、ʈ'、ɖ）であった知徹澄母が、王力氏の表現を借りれば「逐漸」に破擦音化したのである。[15] そして『中原音韻』（14世紀）の頃には、知徹澄母は完全に破擦音化してしまっている。漢越語がいつ成立したかということ自体が問題なのではあるが、仮にMaspero氏のいう通り10世紀頃であったとすれば、知・澄母も照母も、破擦音かそれに近い音であったと考えてよいはずである。

ここで、中国語を受け入れる側の、ヴェトナム人について考えてみたい。敢えて誤解を恐れずに言えば、唐代のインドシナにはヴェトナムという国家は存在しなかったし、従って「ヴェトナム人」も存在しなかった。あったのは唐の一地方府たる「安南都護府」であり、いたのはその支配下の一小数民族たる「夷人」である。解放後の中国で教育を受けた小数民族で、普通話の話せない者はまずいない。教育の充実度が全く違っているにもせよ、千年もの間中国の支配を受けた「夷人」の間には、恐らくかなりの程度中国語が浸透していたはずだ。三根谷徹氏も指摘するように、その中国語学習過程で人々は自国語の音韻体系を離れて、別の音韻体系を反映する発音の練習に励まざるをえなくなる。[16] 知、澄、照母も、こうした耳なれない異国の音声であったろう。私はtr-というquốc ngữ'の表記に、当時のヴェトナム人の意識が象徴的に顕れているのではないかと考える。そり舌性の強い音を持つ言語は、面白いことに、インドからチベット、そして中国北部へと、東南アジアをぐるりと囲む同心円状に広がっている。しか

し、囲まれる東南アジアの言語（タイ系、モン・クメール系など）には、そり舌性の強い音声がほとんど見られない。当時のヴェトナム語がどのような音韻構造を持っていたかは、現在推測する術とてないが、中国北方からやって来た役人の口にする知、澄、照母は、恐らく彼等にとって学習しづらい音であったろうと思われる。自国語の音韻体系から離れれば、それはそり舌性の強い口蓋破擦音であるが、自国の音韻体系に近づけて考えると、tr-とでもとらえざるをえなくなる。三根谷氏は、中国による支配が終わり、中国語の学習が終了すると、漢越語も急速に、ヴェトナム語の音韻体系に適合させられたと指摘している。[17] そうなると、そり舌性の強い知、澄、照母がtr-であるとの意識が定着し、それがquốc ngữ'にも反映するのである。

では、漢越語のtr-は、実際［tr］と発音されたのであろうか。『安南訳語』を見る限り、答えは否であるように思われる。次は、『安南訳語』の音写例である（括弧内はquốc ngữ'）。

語彙項目		漢字音写
茶（trà）	：	者
きじ（trĩ）	：	止
くも（tri tru）	：	知主
厨房（trù phòng）	：	主放

tr-の音写に遣われた漢字は、いずれもそり舌の無声破擦音を声母とするものであり、明らかに破擦音の表記を意図している。無論一般民衆が、自国の音韻体系にひきずられて、漢越語のtr-を［tr］と発音したことはあるだろう。現に一部方言では、いまだに漢越語のtr-を、［tr］と発音することがある。しかし少なくともトンキンでは、中国語学習が終わった後の時代でも、「知、澄、照母＝tr-」という意識が存在する反面、相変わらず破擦音として発音されていたものと考えられる。

さてもう一種類のtr-、つまり民族語の音節であるが、こちらは大分事情

が違っている。quốc ngữ'でtr-の語頭子音を持つ民族語音節は、『安南訳語』を見る限り、すべて「破裂音＋流音」という複子音性を保っている。

語彙項目		漢字音写
一百（một trăm）	:	沈欄
水清(nu'ớ'c trong)	:	匿竜
水出(nu'ớ'c trên)	:	区連
還(trả)	:	達

tr-の音写に用いられているのは、すべてｔかｌの声母をもつ漢字である。陳荆和氏は、音写された中古ヴェトナム語の再構成音としてtl-語頭子音をあてているが、恐らくこの時代には、まだtl- / tr-の交替が起こっていなかったのであろう。

『辞書』に代表される中世ヴェトナム語に、tl- / tr-の交替現象が存在したことは、先に述べた通りである。しかし、この交替は民族語音節に限定されたことであって、『辞書』には、tl- / tr-の二形式を持つ漢越語など記録されていない。これは見方を変えれば、tl- / tr-の交替がtl-からtr-への一方通行だったのであって、tr-がtl-になることはなかったのだとも考えられる。その一方で、漢越語のtr-は、相変わらず破擦音として発音されていた。つまりこの時代、二種類のtr-が存在したのである。つまり、

tr-（A）：複子音（破裂音＝流音），tl-より来源
(Vietnamese proper)

tr-（B）：単子音（破擦音），知、澄、照母より来源
(Sino-Vietnamese)

の二種類である。両者が混同されなかったのは、tr-（A）の基底形式がtl-であり、しかもtr-（B）が漢越語だとの認識があったからであろう。

基底形式		表層形式
tr-	→	affricate / the syllable is〔＋Chinese〕.（obligatory rule）
tl-	→	tr-　（optional rule）

しかしこの「基底形式がtr-である」という情報は、tr-（A）とtr-（B）を弁別する上で全く余剰的である。いうまでもなく、中国語が来源であるか否かの意識さえあれば、両者の弁別は可能になるからである。しかも先述した通り、当時bl-やml-は消失寸前の状態にあり、tl-のみが「xl-型」の語頭子音として残存すれば、音韻体系のsymmetryが損なわれたはずだ。また、ロード師のいうように、tl- / tr-の交替が任意に行われたのであれば、tl-は弁別上全く余剰な形式ということになる。そこで次世代では、tl-の形式が消滅する。

基底形式		表層形式
tr-	→	affricate / the syllable is〔＋Chinese〕.（obligatory rule）
tr-	→	tr- / otherwise.

18世紀以降、更に変化が起こった。tr-（A）までが、破擦音化したのである。この変化の原因はにわかに断じ難いが、思うにtr-→affricateという規則が、一般化されたためではないだろうか。時代が下るにつれて、少なくとも一般民衆の認識では、漢越語と民族語の相違に対する意識が薄らいでいったはずである。その結果、破擦音化規則の「漢越語である場合」という条件が無効になり、民族語も破擦音化規則の適用対象に変わったのである。

5．以上の考察によれば、ヴェトナム語の語頭子音結合は、おおよそ次の

ような過程を経て消滅したはずである。

14 c		17 c		18 c（？）		19以降
bl	→	bl				
ml	→	ml-/ mnh/ nh/ l		→		nh / l
tl-	→	tl / tr	→	tr（複子音）	→	tr（破擦音）

先の芸文学会において発表の機会を頂いた折には、陳荆和氏の再構成したkl-、kr-、pr-の消失の問題、及びr-の摩擦音化などについても言及したのであるが、今回は紙面の都合上割愛せざるをえなかった。

なお、以上の考察は、資料の不足も手伝って、正直推測の域を出ない。無論、私の不勉強から来る欠陥もある。例えば本稿では、18世紀の資料を用いていないが、実は参考にできる資料がないわけではない。それは、チュノムによって翻訳された中国小説『伝奇漫録』である。漢字と同じ表語文字であるチュノムで記されている以上、直ちにその音価を推定することはできないが、その字形などから、ヴェトナム語音史研究に何らかの示唆を与えてくれる可能性はある。いずれそうした資料も検討した上で、この問題に関して再度考察してみたいと考えている。

［註］

(1) 本稿執筆にあたって、慶応義塾大学言語文化研究所所長川本邦衛先生、同研究所員三上直光先生、及び同大学文学部助教授辻伸久先生から有益な助言を頂いた。記して謝意を表したい。

(2) 但しこれは、「ん」や「っ」をsyllabic consonantと考えた場合の数である。

(3) 言語によって、単音節内の声調と同じパターンの抑揚が、二音節にわたって現れる場合があり、これもまた声調であると考えられる。例えばチベット語のラサ方言には、44、13、42、121の４声調があるが、同じ声調が二音節の単語全体にわたって現れる。

(4) 書面チベット語の音節構造をＣ（子音）とＶ（母音）で示すと、ＣＣＣＣＶＣＣになる。但しこうした子音の中には接頭辞や接尾辞が少なからず含まれており、当時のチベット語は厳密な意味で単音節型言語とは呼べない。

(5) B. Karlgren : "The Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese." (BMFEA 26, 1954年) 及び利方桂『上古音研究』(商務印書館, 1980年) 参照。

(6) Maspero (1912), p. 10.

(7) 以下、『辞書』と略称する。

(8) 川本 (1989) 参照。なお、『辞書』のlexicographieについても、同論文が詳しい。

(9) 『辞書』とTaberd氏の中間に位置する18世紀は、ほとんど資料がない。

(10) Maspero (1912), p. 77.

(11) 以下のチュノムは、川本 (1987) 所収の「茶童降誕錄」の形式によった。

(12) Maspero (1912), p. 83.

(13) Maspero (1912), p. 76.

(14) 三根谷 (1972), 第Ⅳ章参照。

(15) 王力 (1980), p. 116.

(16) 三根谷 (1972), p. 170.

(17) 同上。

参考文献

陳荆和 (1969) 『安南訳語の研究』

川本邦衛 (1987) 『傳奇漫錄研究ノート(四)』(慶応義塾大学言語文化研究所紀要19号)

(1989) 『A.ロデスとJ.L.タベルドの"DICTIONARIUM"についてⅠ』(慶応義塾大学言語文化研究所紀要第21号)

H. Maspero (1912) "Études sur la phonétique de la langue Annamite." (BEFEO 12)

三根谷徹 (1972)『越南漢字音の研究』(東洋文庫)

王力 (1958)『漢越語研究』(北京・科学出版社刊『漢語史論文集』所収)

(1980)『漢語史稿』(中華書局)